

〈私の研究〉

これまでの研究について

附・今後の展望

松浦 史子

本年度より、国文科の専任講師として着任致しました、松浦史子と申します。

以下、私のこれまでの研究の経緯と、現在行っている研究についてご紹介させて頂きます。

早稲田大学文学部では、東洋史を学びました。卒業論文には、日中関係史をやりたかったこともあり、遣隋使・小野妹子が「日出るところの天子」から書簡を持参したとの故事で名高い、隋の煬帝を選びました。その際の資料調査にあたって初めて、隋唐時代に先行する「六朝」という時代に触れることになりました。異民族との衝突により中国が南北に分断され、旧来の価値体系が大きく変容を来した、動乱の時代独特のエネルギの蠢きのようなものが、とても印象深く残りました。

その後、東京大学の文学部・中国文学科に学士入学し、戸倉英美教授の指導下に入りました。興味の対象は、混沌としたエネルギーを持つ「六朝」という時代にこそ開花しえた絵画と文学・宗教に向かい、世界最古の画論である顧愷之の「画雲台山記」と神道教の

関わりについて、二つめとなる卒業論文を書きました。修士過程入学以降は、神話・神仙世界へのさらなる興味から、奇異な図像を伴う中国最古の神話的『山海経』の六朝時代における受容に、研究テーマを定めました。

博士過程に入学してからは、『山海経』という書物が、動乱の漢魏晋南北朝時代に活きた人々の思想や文学に、どのように受容されたのかについて、とくに六朝時代の初めの詩人にして博物学者である郭璞と、六朝末の詩人・江淹という二人の文人を採り上げ検討しました。郭璞は『山海経』最古の注釈者として有名ですが、一方の江淹については、これまでの『山海経』受容史ではまったく採り上げられてきませんでした。これに対し、江淹が『山海経』の欠落部分を補うべく自ら『赤泉経』という書物を編纂したという史実などに注目し、江淹にも古来の神話的地誌『山海経』への学究的受容があったことを明らかにし、さらにこのような視点から『山海経』の最古の注釈者・郭璞との間に成立した著名な「五色の筆（江淹才尽）」故事を再考するなど、いくつかの新しい江淹論の作成に挑みました。博士論文「六朝文学に於ける『山海経』の受容について－郭璞と江淹を中心に」（二〇〇九年、東京大学に提出、学位取得論文）の骨子になるのは、郭璞と江淹の文学的継承関係を踏まえた、『山海経』の受容研究ですが、郭璞に関する考察が不十分なことについては、まず江淹研究からスタートしたという経緯にもよります。漢以降の讖緯思想の影響のもと、古来の原始的吉凶観をもつ『山海経』の異形の動植物・神格を該期の政治とも深くかかわる瑞祥として受容し、それを初めて『山海経図讚』という文学の形に仕立てたのは、六朝始め

の郭璞でした。瑞祥が異形なのはなぜか。このこと自体、実は大きな研究テーマであり、目下、検討中の課題なのですが——。ともあれ博士論文の提出後は、この郭璞の瑞祥觀念に連なるものとして、漢代における異形の瑞祥と異形の博物志『山海経』の関わりを推測しつつ、漢魏六朝時代に作成された、神話的図像について研究を始めた。 (以上、博士論文のほか『山海経』の図像については、拙著『漢魏六朝における『山海経』の受容について——神話の時空と文学・図像』汲古書院、日本学術振興会平成二十三年度科学研究費補助金・研究成果公開促進費〔課題番号S3046〕二〇一二・三に所収。)

『山海経』が図像を伴うことは、よく知られています。中国を代表する著名な六朝詩人・陶淵明の「讀『山海経』」や、同じく六朝時代始めの博物学者・郭璞『山海経図讚』はすべて、『山海経』の図像に基づき作成されたものとされますが、残念ながら、現在、我々の目にできるのは明代以降の『山海経』図であり、六朝人の眼にした図像については知ることは出来ません。これに対し、博士課程入学以降、日本学術振興会の科学研究費(特別研究員奨励費DC2, PD, 若手研究B)に採用される機会に恵まれたこともあって、郭璞や陶淵明の目にした『山海経』の図像の様相を明らかにすべく、中国各地で出土する漢代の画像石に刻まれる神話的図像のフィールド調査を続行しています。

これまでに、画像石の主要な出土地である山東・四川・陝西・河南のほか、浙江・江蘇・甘肅・内モンゴルなど様々な地に訪れ、各地から出土する神話的図像の調査をおこなってきました。中国での

フィールド調査は、現地の文物局や博物館の職員の方々にお世話にならねば確実な成果はほぼ見込めないもので、調査は概ね、現地スタッフと共にを行うことになりました。今まで訪れた地では、本舗初公開というような図像も少なくありませんでしたが、ただ、それらの価値が知られないままに、現代中国の目まぐるしい発展開発の犠牲になっている惨状もしばしば目にしました。この惨状をなんとかしてほしい、という、現地スタッフの切なる声も幾たびと無く耳にしてきました。中国の急速な開発の陰に破壊されゆく遺物の多さを嘆く現地スタッフも、調査や保護を希望するものの、資金やチャンスの問題で十分に動くことのできない現状もあります。隣国の一研究者として、今の私にできることは、日本政府の科研費をメインとする各種資金により、少しでも多く、中国各地に散在する神話的図像をデジタル画像として記録し、国の枠を超えた東アジア共通の文化的遺産として正しく伝えてゆくことです。そして多くの価値ある文化財が失われつつある現在、このような歴史的・文化的遺物の保護こそは、政治的しがらみを超えた、東アジア国家間の真の文化的協力関係が求められる喫緊の問題であるように想っています。

今年は北朝鮮との境にある高句麗壁画群にみる神話的瑞祥図について調査の予定です。二〇〇五年、ユネスコの世界遺産に指定されてからというもの、参観者は増えましたが、この地から出土した瑞祥の研究については、神話図像の研究の立ち後れ等から、まだまだ未検討のものが少なくありません。日本の古代文化研究にも深く結びつくものとして、今後も図像と文献の相互照射による東洋のイメージシンボルの研究を続けてゆきたく想っています。